



出版記念講演 トークイベント

『マンガ認知症【介護施設編】』出版記念

～認知症がある人と家族は何に困っているか～



えんの定例総会後、マンガ認知症の出版を記念して、トークショーが行われました。登壇者は漫画家のニコ・ニクルソンさん、編集者の藤岡さん（マンガ認知症のなかではF岡さんとして登場）、老年心理学の第一人者である佐藤真一さん、そして代表の小島さん。藤岡さんの華麗なる司会進行のもと、あっという間の1時間が過ぎ、終わってしまうのが惜しい気持ちでした。

まず、福祉の現場で働くもののひとりとして、「介護をしている家族の施設入所を考えるのはどんな時?」と問われたら、「昼夜逆転して介護が大変になってきたら?それとも排泄の失敗が多くなったらかな?」と答えそうなところを、小島さんは「殺したくなったらよ」と答えたと。それに「感動した」と佐藤先生、小島さんのこの返答が『マンガ認知症施設介護編』への監修要請へと繋がったと言います。「なんと物騒な!」と思う反面、家族の介護をしながら働く仲間が「口には出さないけれど、心の中で何度も親に手をかけたことがある」と話していて、介護家族にとって、自分の限界を自覚する重要なポイントだとも感じました。

ニコさんからは自分のお祖母さん（書籍では婆ルソンとして登場）への介護についてお話してくださいました。サービス付き高齢者住宅にいた時は表情が乏しく、特養ホームに入所してからは表情が出てきたと言います。「これぞプロ!」と感じる場面は多々あったそうで、婆ルソンさんの排泄介助が始まる様子を眺めていたら、スタッフより「少し離れていてもらえませんか?」と言われたそうです。家族でも本人のプライバシーを優先させたことに感動したと話していました。「介護は誰でもできる仕事ではない!」と言ってくださったことが嬉しく、また、私たち介護職にとっては当たり前のことでも、びっくりする人もいるのかと改めて感じました。

この本に小島さんが加わったのは、前著の岩波書店「あなたはどこで死にますか」を読んで、具体的な数字がたくさん盛り込まれていたからだったとのこと。ニコさんは「こんなにお金がかかるのか!母はどうにかなるかもしれないけど自分自身は難しいかも…」と思われたそうです。お金の話が描かれているのはそんな理由だったのですね。だから介護と無縁な人々に届く書籍ができたのだと思います。

トークショーを終えて、私たち福祉職には当たり前のことでも、一歩外に出れば「それは初めて聞いた!」ということばかりなのだなと感じました。改正（改悪?）のたびに煩雑になっていく介護保険制度を、より分かりやすく、よりイメージしやすく伝えていくのも私たちの大切な役割だと実感しました。

（ケアサポートえん／遠野瑞穂）